

修士論文(要旨)

2017年1月

友人間会話におけるスピーチレベルシフトについて
—中国語を母語とする日本語上級学習者を中心に—

指導 堀口 純子 教授

言語教育研究科

日本語教育専攻

215J3004

金銀姫

Master's Thesis(Abstract)
January 2017

Speech Level Shifts in Conversations between Friends: A Study of a Advanced Chinese
Learners of Japanese

Jin Yinji

215J3004

Master's Program in Japanese Language Education

Graduate School of Language Education

J.F. Oberlin University

Thesis Supervisor: Sumiko Horiguch

目次

第1章	はじめに	1
1.1	研究背景・動機	1
1.2	研究目的	2
1.3	本論文の構成	2
第2章	先行研究	3
2.1	スピーチレベルシフトに関連する用語	3
2.2	接触場面のスピーチレベルシフトに関する研究	3
2.3	初対面会話におけるスピーチレベルシフトに関する研究	4
2.4	友人間会話におけるスピーチレベルシフトに関する研究	4
2.5	スピーチレベルシフトの生起条件について	5
第3章	調査概要	6
3.1	調査協力者	6
3.2	データについて	6
3.3	調査方法	7
3.4	文字化の基準	8
3.5	発話文の認定について	8
3.6	スピーチレベルの分類について	9
3.7	スピーチレベルシフト	10
第4章	調査結果	12
4.1	スピーチレベルの選択	12
4.2	スピーチレベルシフトの分析	14
4.2.1	各発話者のスピーチレベルシフトの選択	14
4.2.2	普通体から丁寧体へのスピーチレベルシフト	17
4.2.3	丁寧体から普通体へのスピーチレベルシフト	27
第5章	総合的考察	39
5.1	日本語母語話者に見られるスピーチレベルシフトの特徴	39
5.2	日本語上級学習者に見られるスピーチレベルシフトの特	41
5.3	日本語母語話者と日本語学習者のスピーチレベルシフトの相違について	44
第6章	まとめと今後の課題	47
6.1	まとめ	47
6.2	今後の課題	48
	参考文献	a

社会生活の中で円滑な人間関係を構築するためには、適切な言語使用が非常に重要である。特に、日本語では、丁寧体(デス・マス体)と普通体(ダ体)という文末スタイルがあり(ウォーカー泉 2011, 大塚 2013, 陳・川口 2012 など), その適切な使い分けが円滑な人間関係の構築において、中心的な役割を担っていると言っても過言ではない。実際、日本語母語話者はコミュニケーションの場で、意識的にあるいは無意識的に、丁寧体から普通体へ、普通体から丁寧体へのシフトを頻繁に行って、相手との距離感を調節したりしている。だが、母語が完全に違う言語形式を持っている日本語学習者にとっては、丁寧体と普通体の使い分けは簡単に習得できるものではなく、うまく使えないと、場合によっては、相手に想定外の距離感や失礼な印象を与える恐れがある。

稿者も第 2 言語としての日本語使用者であり、日本語社会で生きている一人として、スピーチレベルシフトの難しさを実感している。稿者は中国の大学で日本語を専攻し、日本語能力試験の最上位級である N1 も取得しており、日本に来た際は、日常会話には問題がなかった。しかし、学校やバイト先などで、なかなか日本人と親しくなれないことに気がついた。中国で日本語を勉強した際は、親しい間でも、一貫して丁寧体を使うと教わったのに、アルバイト先の人や日本人の同じゼミ生は 2, 3 回会ってからは、年下にも関わらず、普通体で話してきた。これに対して稿者はどのタイミングで丁寧体から普通体へシフトすればいいかわからず、相手が普通体で話しても、丁寧体で通していた。これが相手との距離が縮められなかった原因かもしれない。また、授業中に相手が教師であるにもかかわらず、普通体を使う場面を耳にすることがあるなど、丁寧体を使うべき場面についてますます混乱してしまった。このような問題は稿者だけではなく、多数の学習者が直面している問題であることに気づき、スピーチレベルシフトについての研究を始めた。

本研究では、対友人の接触場面での日本語母語話者と日本語上級学習者のスピーチレベルシフトの特徴を明らかにすることを目的とした。その特徴を明らかにするため、1対1の友人間会話を設定し、5 組のデータを収録した。会話データは稿者が「基本的文字化の原則 BTSJ(改訂版)」(宇佐美 2011)に従って文字化した後、分析を行った。

まず、日本語母語話者と日本語上級学習者のそれぞれのスピーチレベルの使用実態を明らかにした。スピーチレベルを大きく丁寧体、普通体、中途終了型の 3 つの種類に分けて分析した。その結果、日本語母語話者であれ、日本語上級学習者であれ、友人間会話においては、普通体の使用が圧倒的に多く、基本レベルを普通体に設定していることが観察できた。また、日本語上級学習者の普通体の使用が日本語母語話者より少ないことから、日本語上級学習者のスピーチレベルシフトが日本語母語話者より頻繁に行われていることが分かった。

次に、日本語母語話者と日本語上級学習者がそれぞれどのような場面でスピーチレベルシフトを行っているかを分析した。その結果、日本語母語話者と日本語上級学習者のスピーチレベルシフトの特徴に差異が見られた。

普通体から丁寧体へのスピーチレベルシフトは、日本語母語話者では、「① 説明する場面」、「② 確認された時の応答場面」、「③ 相手に同意や応答を求めるために質問する場面」の 3 つの場面に生じたが、日本語上級学習者の普通体から丁寧体へのスピーチレベルシフトは「① 説明する場面」、「② 確認された時の応答場面」、「③ 相手に同意や応答を求めるために質問する場面」の 3 つの場面以外に、「④ マイナスな内容を相手に伝える場面」、「⑤ 繰り返しの場面」、「⑥ 習慣になった場面」にも生じた。

また、丁寧体から普通体へスピーチレベルシフトは、日本語母語話者では「① 独話する場面」、「③ 相手に指摘をする場面」と「⑤ 相手の発話に対する反応場面」、「⑥ 確認のために質問す

る場面」で生じたが、日本語上級学習者の丁寧体から普通体へのスピーチレベルシフトは「① 独話する場面」、「③ 相手に指摘をする場面」と「⑤ 相手の発話に対する反応場面」、「⑥ 確認のために質問する場面」以外に、「② 相手に意見を述べる場面」、「④ 感情を表す場面」、「⑦ 説明する場面」、「⑧ 繰り返しの場面」、「⑨ 新しい話題へ導入する場面」にも生じた。

以上の結果から、日本語母語話者であれ、日本語上級学習者であれ、互いにスピーチレベルシフトをすることで談話を進め、心理的距離を縮めようとしたことがわかった。スピーチレベルシフトは円滑にコミュニケーションを行うための重要な戦略である。日本語母語話者は自分の発話に注目してもらうため普通体から丁寧体へシフトし、またすぐ普通体に戻ることで親密感を感じさせる効果を狙ったと考えられる。日本語上級学習者は気持ちを伝える祭や、質問する際にスピーチレベルをシフトすることで話の展開を促していたが、日本語母語話者の影響を受けやすく、日本語母語話者の発話を模倣、同調することで心的距離を縮めようともしていたと思われる。また、日本語上級学習者の場合は、習慣化した特定の丁寧体の言葉の使用がスピーチレベルシフトと思われる状況を作り出しており、言語的要因がスピーチレベルシフトに及ぼす影響が決して小さくないことが明らかになった。

参考文献

- 伊集院郁子 (2004) 「母語話者による場面に応じたスピーチスタイルの使い分け—母語場面と接触場面の相違—」『社会言語科学』 6 (2), 12 - 26.
- 上仲淳 (2007) 「中国語を母語とする上級日本語学習者のスピーチレベルの選択基準」『大阪大学言語文化学』 16, 141-154.
- 宇佐美まゆみ (1995) 「談話レベルレベルから見た敬語使用—スピーチレベルシフト生起の条件と機能—」『学苑』 662号, 27 - 42.
- 宇佐美まゆみ (2015) 「日本語の「スタイル」にかかわる研究の概観と展望—日本語会話におけるスピーチレベルシフトに関する研究を中心に—」『社会言語科学』 18, 7 - 22.
- ウォーカー泉 (2011) 『初級日本語学習者のための待遇コミュニケーション教育—スピーチスタイルに関する「気づき」を中心に—』スリーエーネットワーク.
- 大塚容子 (2013) 「初対面の3人会話における文体シフトの効果—ディスコース・ポライトネスの観点から—」『岐阜聖徳学園大学紀要』 52, 17 - 27.
- 岡崎渉 (2015) 「上級日本語学習者による普通体へのスタイルシフト—インフォーマルスタイルに着目して—」『広島大学大学院教育学研究科紀要』 64, 147 - 156.
- 酒井智美 (2015) 「スピーチレベルシフトに関する研究—親しい先輩・後輩の会話をもとに—」『東京女子大学言語文化研究』 24, 36-50.
- 田所希佳子 (2012) 「初対面二者間会話におけるスピーチレベル教育に関する考察—言語面と意識面に注目して—」『待遇コミュニケーション研究』 9, 待遇コミュニケーション研究会 81 - 96.
- 陳新・川口良 (2012) 「中国語を母語とする日本語上級学習者の文末スタイルシフトに関する—考察—」『言語と文化』, 25, 70 - 100.
- 陳文敏 (2003) 「同年代の初対面同士による会話に見られる「ダ体発話」へのシフト—生起しやすい状況とその頻度をめぐって—」『日本語科学』 14, 7 - 28.
- 陳文敏 (2004) 「台湾人上級日本語学習者の初対面接触場面会話におけるスピーチレベル・シフト—日本語母語話者同士による会話との比較—」『日本語教育論集』 20, 18 - 33.
- 寺尾綾 (2010) 「文末形式の運用とスタイル切り換え—日本語を学ぶ中国語母語話者の縦断データから—」『大阪日本語研究』 22, 113 - 114.
- 三牧陽子 (1993) 「談話の展開標識としての待遇レベル・シフト」『大阪教育大学紀要. I, 人文科学』 42 卷 1号, 39 - 51.
- 三牧陽子 (2002) 「待遇レベル・シフト管理から見た日本語母語話者間のポライトネス表示—初対面会話における「社会的範囲」と「個人のストラテジー」を中心に—」, 『社会言語科学』 5 (1), 56 - 74.